

第三回 【国語】

二〇二六

- 問題文は9ページです。
- それ以外に問題、答案用紙の2枚があります。
- 時間は50分です。
- 答えはすべて答案用紙に書きなさい。

第三回 国語科問題文

二〇二六

[一] つぎの詩と解説文を読んで、別紙の問題に答えなさい。

ぼくは言う

大げさなことは言いたくない

ぼくはただ水はすき透^{とお}っていて冷いと言う
のどがかわいた時に水を飲むことは

人間のいちばんの幸せのひとつだ

確信をもって言えることは多くない

ぼくはただ空気はおいしくていい匂^{にお}いだと言う
生きていて息をするだけで

人間はほほえみたくなるものだ

あたり前なことは何度でも言っている

ぼくはただ鯨^{くじく}は大きくてすばらしいと言う

鯨の歌うのを聞いたことがあるかい

何故^{なぜ}か人間であることが恥^はずかしくなる

そして人間についてはどう言えばいいのか

朝の道を子どもたちが駆けてゆく

ぼくはただ黙だまっている

ほとんどひとつの傷のように

その姿を心に刻みつけるために

水を飲む、呼吸する、というごく A の行為に、私たちはどれだけ幸せを感じることができるでしょうか？ この詩の中で「ぼ

く」のことばは、日常のさまざまな幸福の瞬間しゅんかんを切りとっています。

第三連では、世界が一気に広がります。鯨という生き物と人間とを比較かくしたとき、そのあまりの ① と ② に、^B「ぼく」は、

人としての恥じらいすら感じてしまったようです。

第四連では、朝の道を駆けてゆく子どもたちを見つめます。「ぼく」は、(ア) への可能性を秘ひめた子どもについて、安易いにことばを発することはできないようです。第二連の「確信をもって言えることは多くない」という表現を鑑かんみる考え、子どもについて語ることは、無限の可能性ゆえにかえって不可能なことなのではないか、とも受け取れます。

この詩からは、子どもという存在への非常に深い (イ) と、その (ア) に対するいささか(ほんの少し)の不安、しかしそれをくつがえしてあまりある、大きな (ウ) を見出すことができるでしょう。

(萩原昌好「谷川俊太郎」より)

[二]

つぎの文章を読んで、別紙の問題に答えなさい。

小学校の国語の授業で、教材の詩を声に出して音読させられた経験をもたない人はいないと思います。またお正月に百人一首のかたで遊んだことのある人も多いと思います。テレビで宮中の歌会始の朗詠の模様を見たことだってあるでしょう。小さいころ、わらべうたをとえながら遊んだ思い出をもっている人もまだいるかもしれません。

それらはみな別々のことのようにいて、根っこはひとつです。印刷された文字を黙読するのではなく、声に出してとえ、あるいは音読する詩。いわば目に見えないけれど、耳に訴えかける詩とも言うべきものが、今でも私たちの生活の中にたくさんあります。私たちはただそれをあまり自覚していないだけです。

つい百年ほど前までは詩は声に出して読む、つまり吟ずるのが当たり前でした。からだがむずむずして自然に声に出したくなるのが、他の言葉とは違う詩というものの魅力だったと言ってもいいでしょう。吟ずることで自分も楽しみ、人とも交流する、今で言えばカラオケみたいなものだったのかもしれませんが。

ですが今では詩は本のページの上に印刷してあって、ひとりひっそり黙読するのが常識になってしまいました。電車の中で詩集をひろげて大声で朗読したりすれば、まわりの人にじろじろ見られてしまうでしょう。そんなふうには詩が声に出さなくなったのは、声に出す気になれない詩、音読してはかえって意味が分からなくなる詩が増えたからです。そのように声をなくしたことで詩は多くのものを得ましたが、同時にまた多くのものを失いましたのです。

詩を自分で声にするのは照れくさいものです。小学校の教室でみんなで声を合わせて読む、いわゆる斉読はそうでもないかもしれませんが、あれは私の意見では詩の朗読と言えるものではありません。詩はあくまでひとりひとりの人間の心とからだと声によって読まれるのが基本だと思います。私も三〇年ほど前から自作朗読というのを人前でするようにりましたが、初めのうちはとても緊張して胃が痛

くなったほどでした。

しかしだんだん自分の詩を自分の声で人に伝えるのが楽しくなりました。活字では味わえない良さに気がついたと言ってくれる人もいたし、反対に作者の声が詩の広がりやをせばめてしまったと言う人もいましたが、私は黙だまっている活字を通してしか触ふれ合えなかった読者と、じかに向かい合えるのが嬉うれしかったし、また音読することで自分の詩の書きかたも少しずつ変わってきました。

詩は^(a) の魂たましいから生まれるものです。それは今も昔も変わりはありません。しかし昔の日本人は同時に詩を^(b) で楽しむべきを知っていました。歌合わせ、連句、そして百人一首もまたそうです。

気の合った者同士が集まって詩をつくり、それを贈おくり合ったり、感想を言い合ったり、またみんなで合作したりして楽しんだのです。そんなときには詩は紙に書いて見せ合うだけでなく、きっと声に出して読み合ったものと想像されます。そういう背景があつてこそ、自分では詩をつくらない人々もまた、詩をそれぞれの生活の中で楽しむことができたのではないのでしょうか。それは暗記され口誦しやうされることで私たちの心身に入りこみ、知らず知らずのうちに私たちの気持ちをとときには慰なぐさめ、ときにははげますものでした。鑑賞かんかんやら解釈しゃくやら言うより先に、おそらくは文字よりも先に、声としての詩が私たちにおとずれていたのです。私たちの母の言葉である日本語の調べとリズムはどこよりもまず、あなたのからだのうちにひそんでいるのです。

(谷川俊太郎「風穴をあける」より)

[三]

つぎの文章を読んで、別紙の問題に答えなさい。

1980年代末のバブル景気のおかげで、東京でいくつかのプロジェクトを依頼されました。しかし、1990年代にはいるとすぐに、バブルが突然はじけ、不景気がやってきて東京の仕事がすべてキャンセルされました。それから10年間、東京では1軒も建築を建てることができませんでした。今振り返ると、この10年間はなかつたと思えるくらいに、僕にとって重要な時間でした。いろいろなことを学び、新しい方法を発見することができました。若い人にとっておきのメッセージをくださいと言われた時は、「仕事がないことが、建築家にとって一番重要です。仕事があると、つつい仕事に追われてしまう。仕事がないといういろいろ考えることができます、自分の方法、自分の建築を見つけられるかもしれません」と答えることにしています。

丁度バブルがはじけた頃、四国の山奥の町に行かないかと、誘われました。子供の頃から田舎に興味があつたせいもあり、四国のチベットみたいなところだと言にぐつとききました。

僕の父親は、東京の大企業につとめるサラリーマンだったので、自分の定年の話、自分がいつまで働けるかわからないという話をいつもしていました。だからお前はその日にそなえて候約し、しっかり勉強しろという話しかしないので、家での会話は退屈で、休みごとに横浜の家を脱出して、西伊豆や信州に住む親戚の家に泊まりに行きました。田舎のおじさん、おばさんは、田舎は大変だ、都会はいいわねえと愚痴ばかりでしたが、その大地と密着した暮らしぶり、農業の苦労話は、父の愚痴とは違って、リアリティがあり、彼らは輝いて見えました。その四国の山奥の梶原という町が高知でも雪が降るほどに田舎だという話を聞いて、いてもたってもいられなくなったのです。

梶原の町の人とは妙に気があって、結局6つの建物を設計させてもらいました。なぜ、そんなに長いつき合いになったかというと、僕が信頼を築くことを大事にしたからです。信頼を失うと、その場所からもう一度依頼されることは、まずありません。

しかし、逆にいい建築を作って喜ばれると、相互に信頼関係が生まれ、いい評判が広がってその近くの場所からも仕事を頼まれることもあります。へアへ一度信頼関係さえ築ければ、ある程度の⑥なデザインも、「おもしろそうだからやってみようか!」ということになります。梶原の茅葺を壁にしたユニークなデザインは、へイへ信頼関係があったからこそ、実現したのです。茅葺屋根というのは世界中にあります、「茅葺壁」というのは、あまり見たことがありません。地元の職人さんと一緒にやってこの新しいディテール(細部の設計)に挑戦しました。

逆に信頼が築けていない相手とは、お互いが警戒してしまって、心配が心配を生み、なんでもない控え目な提案でも、「危ないんじゃないか、使いにくいものになるんじゃないか」と疑われて、使われないのです。

その意味で建築家というのは長距離走者であると僕は考えています。長く同じペースで走り続けているうちに、少しずつ信頼を獲得していくことができ、その築き上げた信頼の上に、今までやったものより少しだけ大きい建築を建てるチャンスがめぐってきたり、少しだけ⑥なデザインやディテールを実現するチャンスがめぐってくるのです。しかし、僕もそうでしたが、若い頃は誰でも、早く有名になりたくて、人をびっくりさせるような建築を作りたいという気持ちになります。へウへ短距離走のスタートに立ったような感じで、まわりを何も見ずに、猛ダッシュしてしまうのです。すると、すぐに息があがってしまいます。すぐに長距離走者になれるわけはありませんが、長距離走のリズム、コツを身につけさえすれば、長く走ることとはそれほど難しいことはありません。次第に、体が長距離走になじんできます。

僕が梶原に行く直前、バブル崩壊の直前にデザインした「M2」という建築は、僕の短距離走の産物です。完成してみると、「M2」は世間からびっくりされるどころではなく、その形は「バブルの象徴」であるという批判を受け、激しいブーイングを浴びました。東京での仕事はまったくなくなり、声すらからなくなりました。

この「M2」が竣工(しゅん)工(こう)事が完了(しゅん)したこと直後にバブルがはじけたのは、ある意味で幸いでした。「M2」のような短距離走を続けて

いたら、時代のスピードにつぶされていただろうと思います。バブル崩壊のおかげで、僕は長距離走を始めました。というか正確には、ゆっくり走るしかなかったのです。ゆっくり走っているうちに、長距離走者独特の呼吸の仕方を覚えたり、体調の管理のやり方を自分で学ぶようになりました。

長距離走は決して楽ではありません。長距離走というのは、基本的にとても孤独なものです。短距離走の時には、すぐ脇を走っている人がいて、ゴールも見えていて、孤独を感じる前に勝負はついてしましますが、長く走っていると、近くに走っていたはずの人が見えなくなったり、コーチだと思っていた人が突然消えてしまったりの繰り返しで、結局自分は一人で走っているんだなあとということを思い知らされます。長距離走には、孤独に耐えるだけの①が必要なのです。

栃木県の芦野も、僕にとつては忘れられない場所のひとつです。芦野で石屋をやっている白井さんから、石の美術館を作りたいという連絡があり、田舎に行きたい気持ちがあらずいて、すぐに東北新幹線に乗り込みました。

まず、白井さんの自宅兼工場を見せ②もらったのですが、敷地内の庭に穴を掘って石を掘り出し、それを物置小屋で加工し③ているという農作業的な感じが、また好きになりました。その庭から出てくる芦野石という石の、セメントと間違え④してしまうくらいの素朴な肌合いも気に入りました。専門的に言うとな山岩と言われ、同じく栃木県内でとれる大谷石と少し似ていますが、フランク・ロイド・ライトが好んで旧帝国ホテルに使った大谷石よりも、もっと地味で清々とした石です。

次に白井さんが最近手に入れたという、街道沿いの、大正時代に建った米蔵を見に行きました。

「この米蔵を改装して、石のアートやクラフト（工芸品）を展示するミュージアムにしたいんです」と、白井さんは恥ずかしそうに語り始めました。米蔵の前庭には、新しい建築を増築してもいいので、これは新旧とりまぜた、おもしろいプロジェクトになりそうだと、期待が膨らんでくるのを感じました。「それで予算はどのくらい掛けられるんですか」と、僕は質問しました。白井さんの答えは、今でも忘れられません。「予算はないんです」。「どういう意味なんですか」と白井さんに聞き返してしまいました。「自分のところには石は山ほ

どありますし、石を積む職人もいますので、彼らを自由に使って頂いて結構ですが、材料を買ったり、他の会社に払うようなお金はないんです」という返事でした。すでに夕闇がせまり、あたりが暗くなると同時に、僕の心も重く、暗くなっていました。「ちょっと考えてみます」と曖昧な返事をして、帰り^eの新幹線に乗り込みました。

その場で返事をしないという^fの^fも、長距離走のコツです。何を言われても、その場ではぐっと飲みこんで、一晚考えることにしています。朝になってみると、不思議なことに、いいアイデアが浮かんでくることです。

次の朝、石^gの職人さんを自由に使つていいという白井さん^hの言葉が、頭の中によみがえってきました。雇^{やと}っている職人さんをタダでいくらかでも使つていいなんて、めったにある話ではありません。職人さんにいくらかでも無理を言つていいのだという白井さんの申し出は、考えてみれば夢のようにうれしい話です。「石の美術館」も、職人さんとの対話によって、石で「透明感を出す」という、誰も試みたことがない新しいディテールの建築ができました。職人さんとのこの種の直接のやりとりから、様々な新しい収まり、新しいデザインが生まれましたが、一番の成果は、彼らとの間で信頼関係が生まれてきたということです。「あの設計のやつ、意外に人の話をよく聞いてくれて、若いのによくできたやつだな」。そんな風な評判がたつと、それができあがった建築のいい評判につながっていくのです。人の評判が、建築のイメージに重なっていくのです。

結局、建築の評価というのは、その建築のまわりにいた人、いる人の様々な評判のそう^④わなのです。「建築が美しければいいんだ」という時代ではないのです。ネットの時代になって、いよいよその傾向が強くなっています。設計者本人の「美しい」という自己評価や自慢^{まん}ほど、あてにならないものはありません。

評判を大事にしろというのは、古臭いお説教に聞こえるかもしれませんが、ネットの時代だからこそ、余計にまわりの評判が大事になっています。その評判を積み重ねていつて初めて、大きな建築を設計するチャンスがめぐってくるのです。その意味で、ネットの時代に建築家には、ますます長距離走者として、まわりに気配りをしながら長く走り続けるし^⑤し^⑤が求められます。

そして長距離走者というのは、待てる人だということです。ひとつずつ信用を得るように努力をし、それが積み重なるのを辛抱強く待てる人だということです。待てない人には、建築を作るチャンスはめぐってきません。

そして待つために大事なことは、毎日のコツコツとした積み重ね自体が楽しいということです。クライアント(注文する人)の話に耳を傾け、近所の人に丁寧(ていねい)に説明し、職人さんから教わって、じっくり待つのです。それぞれの今を楽しむことができれば、いくらでも待つことができます。待てない人は、建築家にはなれません。

(隈研吾「建築家になりたい君へ」より)